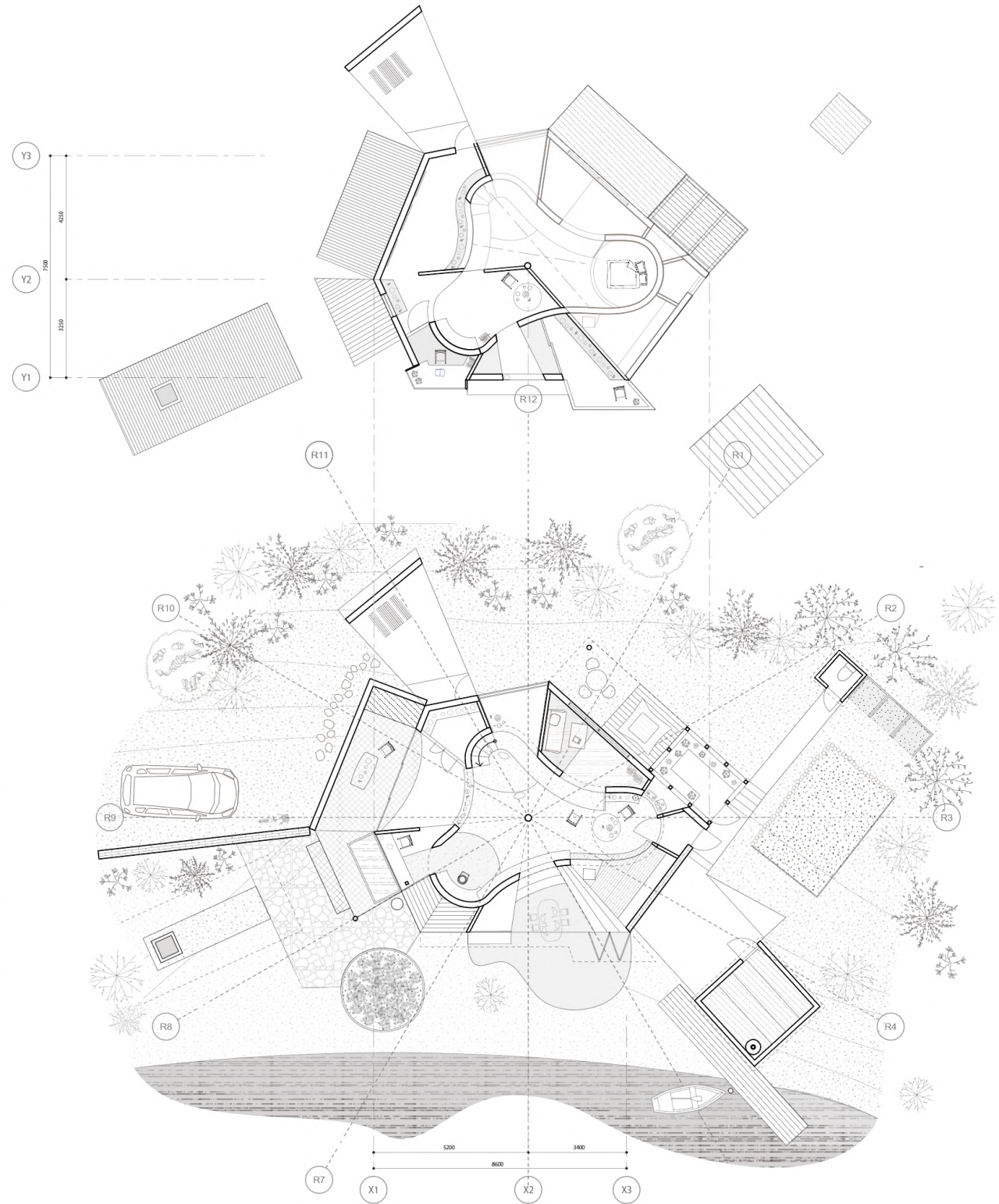
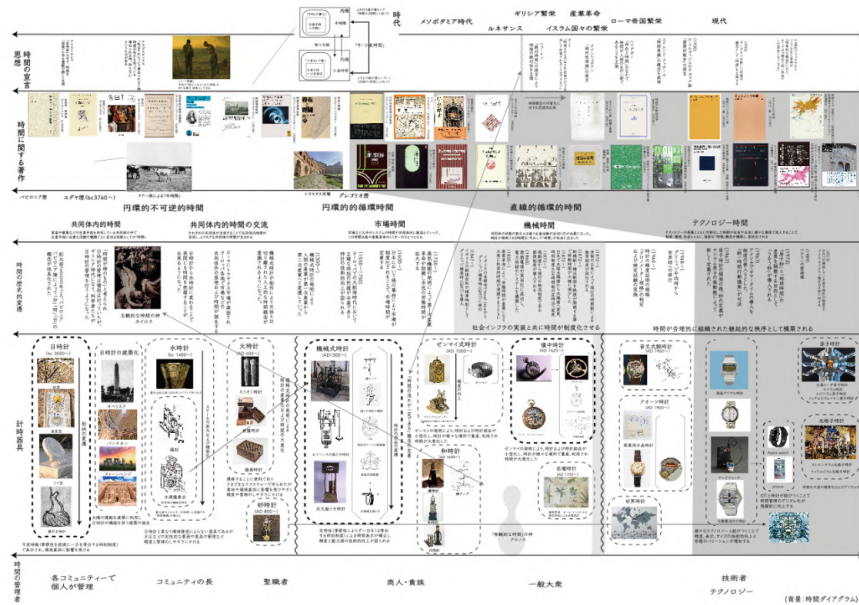
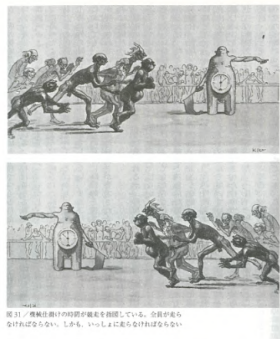
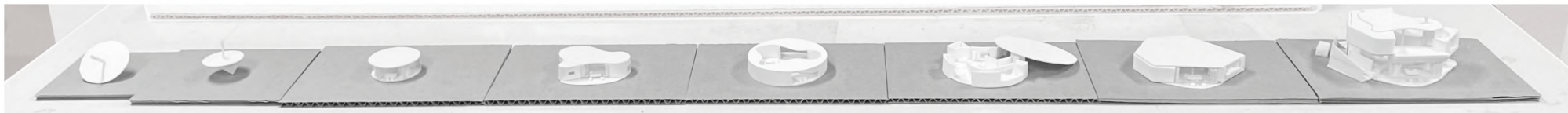


- 北極星へと伸びる日時計から考える環境的設計 -

SD
Z54

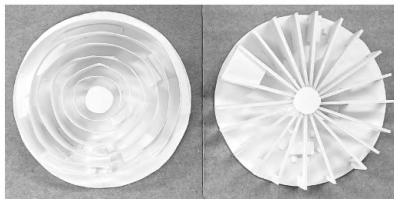
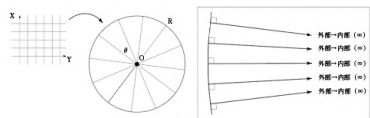


日時計を基にした空間の習作



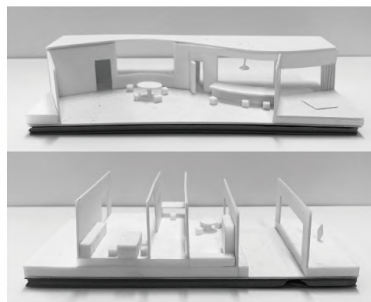
内外の概念を平面として導入する

内部と外部の関係性を、スタディする方法として、円形平面を基本とした設計実験を行う。まず、中心を内部として発散させ円周上を外部とした極限円のような平面を想定し検討を行う。スタディの過程としては、内部と外部に対し放射線上と同心円上に壁を配し、それらをグリッドとして空間を検討する事で、内部と外部の連続性や距離感をスタディする。



同心同德

放射状

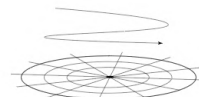
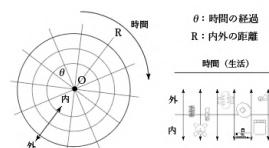


スタディの結果、外部と内部を隔てる壁を背にして作られた空間やそれに開口部を開け内外の関係性を規定する空間など、外部と内部の方向性を元とし様々な空間構成が生じた。また、円形平面の性質上、順次的に検討によって生じた空間構成が原点に向かって連結していく事で空間の連続性が生じた。結果として、この設計実験は、外部と内部を指向した空間の検討とそれらの様々な空間構成がいかに連続性を帯びて配列しうるかの検討に繋がったと考えている。

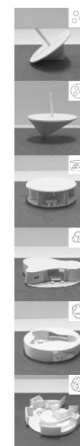


内部と外部の空間構成とその連続性

時間を角度座標として設定する

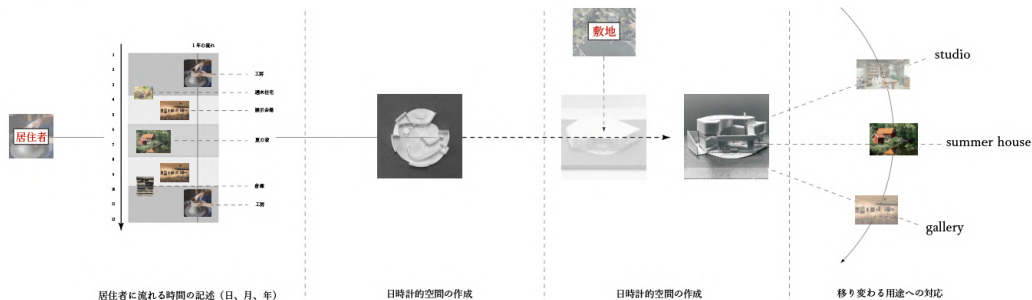


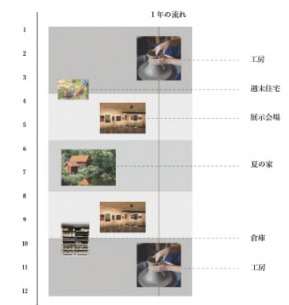
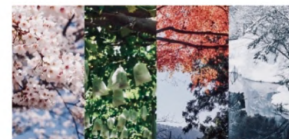
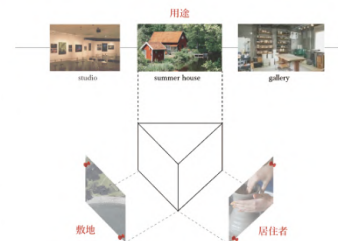
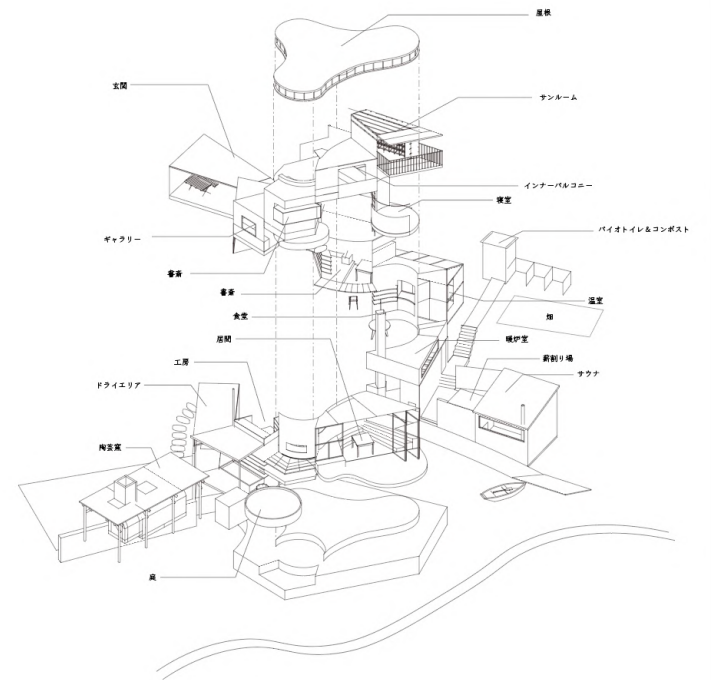
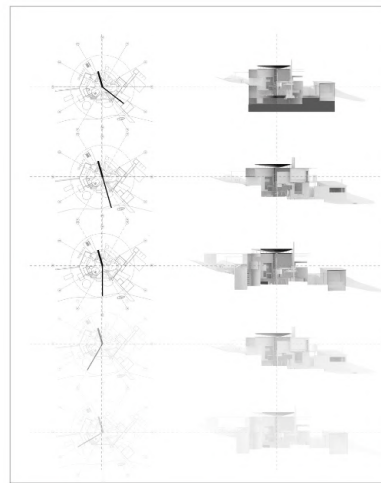
設計実験で得られたプロセスを空間形成の手法として活用し、日時計を空間として形づくることを試みる。まず、平面を文字盤に見立て、一般的な住宅における1日の生活の流れを代入する。そして、その生活の流れに応じて、内外性のプロセスを活用しながら、空間を形づくる。この平面は、「内部」と「外部」の概念を取り入れており、ある種のクロックポジション的な平面と捉えることもできる。



最終的な空間では、1日の時間の流れに合わせ使用される空間がゆるやかに円環状を移動していく。これにより、外部と内部のバランスが多様に変化し、新しい空間構成が生まれる。このような空間は、運動軌道のように動きあわせる使用が可能である。その結果、用途に応じた適応性が高まれ、外部と内部の多様な空間構成を持つことや柔軟な利用が期待できる。また、居住者の生活スタイルの変化にも対応しやすく、柔軟な利用が可能であると考えられる。

■本設計のプロセス





組み合わせによって生じる生活像

